

【資料紹介】大川屋書店版『里見八犬傳』略解題

山本貴恵

大川屋書店版『里見八犬傳』は、明治二十六年十月廿四日に発行された。架蔵本は、明治三十六年九月発行の第十版である（後掲奥付図版参照）。ただし後述する如く、架蔵本は改装本である。

架蔵本の書誌を略述すると、縦21・9センチ、横14・1センチ。最終ノンブルは三六六（ただし、ノンブルは「九」より始まるので、前闕かと思われる。また、挿絵にノンブルはない。詳しくは後述）。

本文内容は、ダイジェスト版とでもいうべきものである。冒頭を示せば、「抑里見又太郎義実が安房に起るのははじめを言はゞ父季基ともろともに結城のしるに盾こもり」とある。本文には句読点がなく、段落の切れ目を○を付すことで示している。

後補前表紙として、印刷された図版一枚（下段所掲図版参照）が背の中ほどから貼り付けられている。図版が貼り付けられた台紙と なっている料紙と、後補後表紙（ただし実際は、「大川屋小説目録其二」「後表紙見返し」、「大川屋小説目録其一」「後表紙」）の料紙は繋がった一枚で、紙質も一致する。従って、後に、前表紙・後表紙を補うためであろう、典籍全体を一枚の紙を以てくるんだものと想像される。背題は存しない。

後補前表紙には墨筆で著者、書名、出版元が書かれている。



【後補前表紙】

曲亭／馬琴／著
繪本南総／里見／八犬傳全
東京／大川屋／發行

なお、書名は、「八犬士傳序」（序題）、「里見八犬傳」（端作題・尾題、奥付題）などとするが、後補前表紙のみ、上掲の如く「繪本南総里見八犬傳」としている。この相違は、先にも触れたように、前表紙が後補され、書名が（恐らくは貸本業者によって）追筆された

ことによるものであろう。

架蔵本の料紙の紙質は、大きく三つに分類することが出来る。

A 後補前表紙・後補後表紙（一続きの料紙）

..... やや厚手の紙（白色）

B 「八犬傳士序」（前半）・見開き図版（十一面）・序（後半）

..... 薄手の紙（白色）

C 本文

..... やや厚手の紙（褪色が進み、褐色を呈する）

また綴じ穴は、Aが三箇所（前掲図版参照）、B・Cが五箇所である。また、B・Cのみ、下から二、三番目の綴じ穴で糸で綴じられているのが確認できる。Aは、B・Cに糊付けされている。ここから想像するに、以下のような段階を経て、今日見る架蔵本のような形態に至ったものなのであろう。

① 原前表紙＋「一〜八頁、序・目次等か」＋C＋原後表紙

※この時点では、線装ではなかった？

←

② 装丁が壊れ（この時、前後表紙・一〜八頁が脱落か）、Bを補った上で、綴じ穴を二つあけ線装とし、仮装丁した。

←

③ さらに、現在の前後表紙を追加し、綴じ穴を新たに三箇所あけ、線装とした。

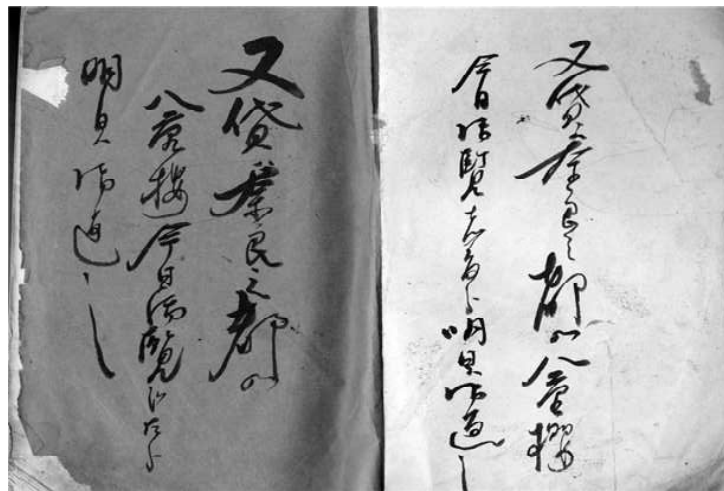
←

④ ③で追加した綴糸が取れ、②の綴糸のみが残った。

後補前表紙には、朱色薄紙の遊紙（後掲図版参照、綴じ穴Ⅱ三箇所）が貼り付けられている。

○

（後補前表紙裏）



（遊紙表）

【積文】

又貸ハ奈良之都の八重櫻

今日御覽した分明日ハ御返し（し）ハ「也」歟（前表紙見返し）

又貸ハ奈良之都の

八重櫻今日御覽した分

明日ハ御返し（同前）（遊紙表）



(遊紙裏)

【釈文】

又貸御無用

又貸御無用 (遊紙裏)

表紙、後補前表紙、遊紙表・裏の筆跡を比べてみたい。

「又」という字に注目して見ると、払いの止め方や筆圧から遊紙表と遊紙裏の二行目は同じ筆跡と見做せる(これを甲筆とする)。一方、後補表紙裏と遊紙裏の一行目の又の払いの入り方や止め方から見て、同じ筆跡と見做せる(これを乙筆とする)。

また、後補前表紙の筆跡は、筆勢や「八」という字から見て、甲筆と判断できるだろう。

なお図版では分かりにくいのが、後補前表紙裏、遊紙表「又貸奈良之都の」という文言の上に、鉛筆で乱雑に線が引かれている。文言を抹消する意図まであったかどうかは断言出来ないが、又貸禁止に対する抵抗の跡と解することは許されよう。

架蔵本Bの、序文・挿絵は、全て『南総里見八犬伝』原典に基づいたものである。絵の端を省略しているが、構図や文言など全て同じである。少し目元の彫りが深く原典よりも鋭い目つきになっている。また、本文前の「八犬傳序」とその続きの序の間に挿絵が配される。本文の中にも挿絵が存する。本文中の挿絵は見開きで十二頁である。全ての挿絵の箇所を、Bの部分を含めて記しておく。

「八犬士傳序」(前半)

挿絵一〜十一

「八犬士傳序」(後半)

挿絵十二 (二七〜二八頁の間)

挿絵十三 (六五〜六六頁の間)

挿絵十四 (一六五〜一六六頁の間)

挿絵十五 (二〇三頁〜二〇四頁の間)

挿絵十六 (二二五頁〜二二六頁の間)

挿絵十七 (二三九頁〜二四〇頁の間)

挿絵十八 (二五五頁〜二五六頁の間)

挿絵十九 (二六九頁〜二七〇頁の間)

挿絵二〇 (二九一頁〜二九二頁の間)

挿絵二一 (三〇五頁〜三〇六頁の間)

挿絵二二 (三十九頁〜三二〇頁の間)

挿絵二三 (三三三頁〜三三四頁の間)

Bの挿絵はどれも順不同であり、『南総里見八犬伝』の内容に即した並べ方になっていない。

C

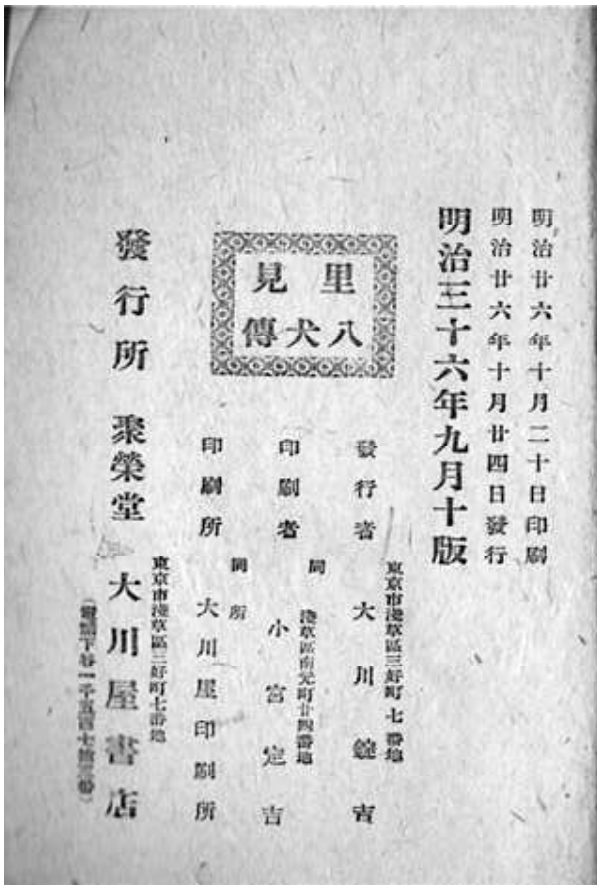
B

例えば、一枚目に玉梓が怨霊となった場面（第肇輯卷四）の次に、妙椿が浜路姫を攫おうとする場面（第九輯卷十一）になっている。三枚目は、信乃と現人の芳流閣での戦いの場面（第四輯卷二）といった如くである。

また、本文前の最後の挿絵（挿絵一一）もなぜか、現人が信乃、道節と船の上で鉢合せする場面（第八輯卷六）となっている。この本文前の挿絵は話の筋とは全く合わない順序となっている。

以上のことから、『南総里見八犬伝』全体の筋を熟知していない人が編集したと考えざるを得ない。

最後に、奥付を掲出しておく。



明治廿六年十月二十日印刷
 明治廿六年十月廿四年發行
 明治三十六年九月十版

東京市淺草區三好町七番地

里見八犬傳

發行者 大川錠吉

同 淺草區南元町廿四番地

印刷者 小宮定吉

同 所

印刷所 大川屋印刷所

東京市淺草區三好町七番地

發行所 聚榮堂 大川屋書店

（電話下谷一千五百七拾三番）

架蔵本は、明治期の貸本のありようをまざまざと残しており、『八犬伝』受容史研究の点で、興味深い事例と考えられる。

【資料紹介】大川屋書店版『里見八犬傳』略解題（『研究と資料』第六十九輯、二〇一三・七）
 《正誤表》

頁	段行数等	誤	正
P 40	下段 4 行目	御覽した分 <small>(ママ)</small>	御覽した分 <small>(ら敷)</small>
P 40	下段 6 行目	御覽した分	御覽した分 <small>(ママ)</small> 御覽した分 <small>(ら敷)</small>

《備考》

伊藤慎吾氏より、「分」字、「ら」と読むべきではないかとのご教示を得た。確かにその方が歌意は通りやすい。ただ、字形の点で「分」を完全には捨てきれなく思うので、前掲正誤表の如き形にすることとした。
 伊藤氏の学恩に深く感謝する次第である。